第7回　三大都市圏の人口動態

1. 都市圏の発展段階と人口動態

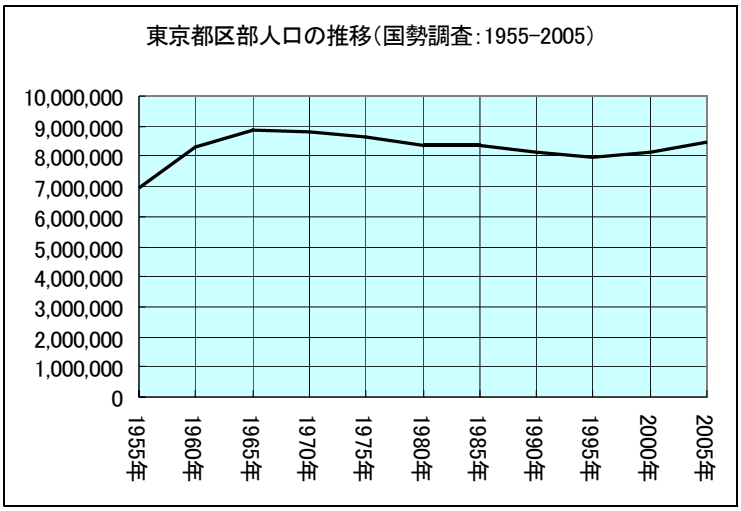
・三大都市圏は、いずれも太平洋戦争末期に米軍の空襲によって壊滅的な打撃を受けたものの、おおむね 1955 年（昭和 30）ごろまでに経済的な復興を遂げ、1965 年頃まで人口が急増した。その背景には、太平洋ベルト地帯の工業化にともなう若年労働力の都市集中がある。
・1965 年以降、東京 23 区と大阪市は人口減少局面に入る。また、東京都全体と名古屋市でも人口の伸びが鈍化した。これは、工場の郊外及び地方への移転とそれにともなう労働者の転出、中心都市における流通・管理機能の成長とホワイトカラー化、そして子育て期をむかえたホワイトカラー労働者の郊外転出によるところが大きい。それでも、この時期に東京都や名古屋市で人口が減少しなかったのは、都市内部でも家族形成期を迎えた若年層の出生率が高かったからである。
・郊外化の波は、1970 年代に次第に弱まっていったが、1985 年以降、バブル経済期の地価高騰によって、ふたたび人口の流出が始まった。このときにも、子育て期をむかえたヤングアダルトが住宅を求めて郊外に転出していった。その結果、都市内部では、すでに定住していたより上の世代だけが残るようになり、しだいに高齢化が進んでいった。
・バブル経済の崩壊と地価の下落によって、1990 年代末には、都市中心部での住宅供給が増加した。そのため、これまで地価高騰によって転出していたヤングアダルト層が都市内部に留まるようになった。しかし、新しいヤングアダルト世代の出生率は低く、人口高齢化による死亡率の増加とあいまって、人口の自然増加はほとんど期待できなくなった。

・都市人口の変化は、自然動態（出生－死亡）と社会動態（転入－転出）に分解することができる。

	自然動態		社会動態	
都市化	（出生＞死亡）	＜	（転入＞転出）	社会増による人口成長
郊外化	（出生＞死亡）	＞	（転入＜転出）	自然増による人口成長
	（出生＞死亡）	＜	（転入＜転出）	社会減による人口減少
再都市化	（出生≧死亡）	＜	（転入＞転出）	社会増による人口成長

都市化：出生が死亡よりも多いがそれ以上に、転入人口によって人口が成長する社会増依存型人口成長
郊外化：転入よりも転出が多いが、その減少分を、都市内部の出生が補ってあまりある自然増依存型人口成長。中心都市（東京 23 区や大阪市）では、自然増加（出生－死亡）が移動による減少（転入－転出）を補いきれずに人口が減少した。
再都市化：出生と死亡の差が少なくなり、転出人口の減少による社会増によって、人口が増加する社会増依存型人口成長。

2. 東京23区の人口動態



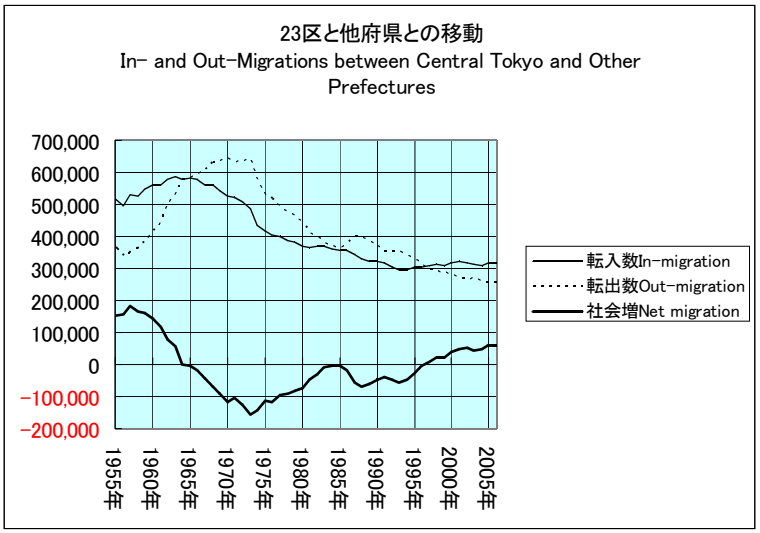
●社会動態

1955-65

・区部人口は、1955 年の 700 万人から、1965 年の 900 万人弱まで、10 年間に 200 万人増加している。

・この時期、他府県との移動を見ると、年間 50 ～ 60 万人の転入者がいる一方で、30 ～ 60 万人の転出者がいた。

・その結果、50 年代後半には年間 20 万人弱の社会増が見られたが、転出者が急増することで 65 年には、ほぼ社会増が 0 になった。



1965-85

・1960 年代後半から区部人口は減少に転じ、1980 年には 835 万人となった。80-85 年はわずかにプラスになった。

・この時期、転入者は年間 58 万人から 36 万人程度にまで減少、転出者は 70 年代前半に 64 万人前後になり、その後減少したものの、1985 年までつねに転出が転入を上回っていた。その結果、最も多い 1973 年には差し引き 15 万人以上の人口を失った。

1985-95

・区部人口は 1985 年の 835 万人から 95 年の 797 万人に、10 年間に 40 万人弱の人口を減らした。

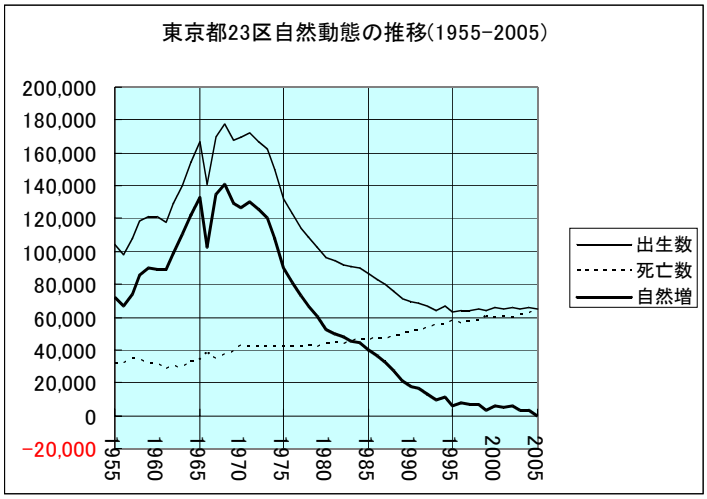
・他府県との移動を見ると、転入数は減少の一途をたどったが、転出者は 80 年代後半にいくらか増加した。その結果、85 ～ 95 年の時期に、年間 5 万人前後の社会減となった。

1995-2005 年

・東京都区部の人口は、ふたたび増加をはじめ、2005 年には 849 万人となった。10 年間に 50 万人増加したことになる。

・他府県との移動を見ると、転入数は 30 万人台で変化はないが、転出数は 30 万人を割り込んで、差し引き年間 5 万人前後の社会増となった。

●自然動態



1955 ～ 70 年あたりまで出生数が急速に伸びている。これは、若年層が転入して、順次、家族形成期を迎えたことを意味している。1966 年は丙午の年で、この年だけ出生数が激減している。この時期、死亡数は 4 万人を下回っており、その結果、出生数の動向によって自然成長の動向が決まってきている。

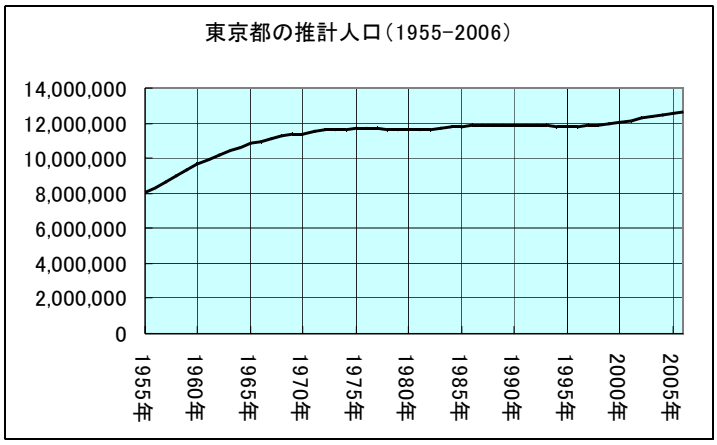
つまり、1965 年までの人口急増は、社会増に加えて、自然増も後押ししていたことになる。

これ以降の人口減少は、1970 年代前半の出生数の高さにもかかわらず、転出人口が多かったためであることが分かる。

1970 年代後半から、出生数は減少の一途をたどり、1995 年以降、横ばいとなる。この時期、死亡数が徐々に増加傾向を示すのは、人口高齢化によるものである。2005 年には、出生数と死亡数はほぼ等しくなり、自然成長は期待できなくなった。

したがって、1990 年代後半の転出数の減少がなければ、東京都区部の人口は減少していたはずである。

3. 東京都の人口動態



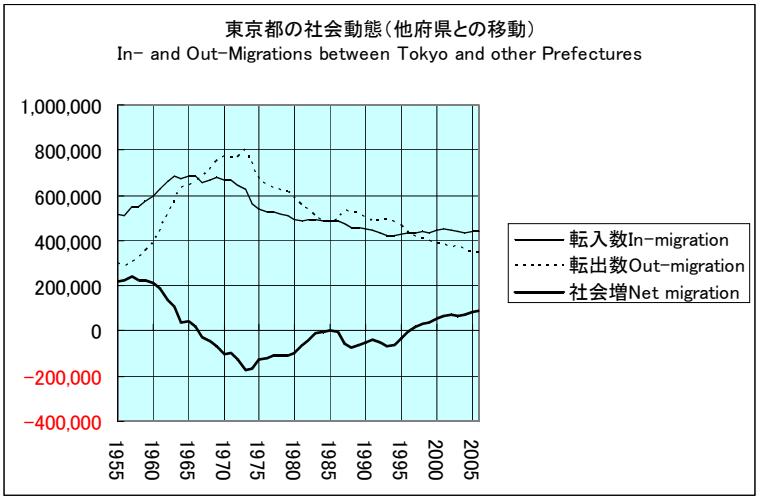
・1955 年から 2006 年までの各年の東京都全体の人口を東京都推計人口によって見ると、1965 年以降、人口成長率が鈍化し、70 年代にはほぼ横ばいになっている。しかし、2000 年以降は、ふたたび人口増加が顕著になっている。

●社会動態

・他府県との移動をみると、区部と同様、1965 年を境に、それまでの転入超過から、転出超過に転じている。1965 年から 1985 年まで、著しい人口の転出を経験している。

・また、バブル経済期の 1985 年から 1995 年あたりまでも、転出数が増加している。

・1995 年以降、転入数は大きな変化がないのに、転出数が減少することによって、社会増に転換した。



●自然動態

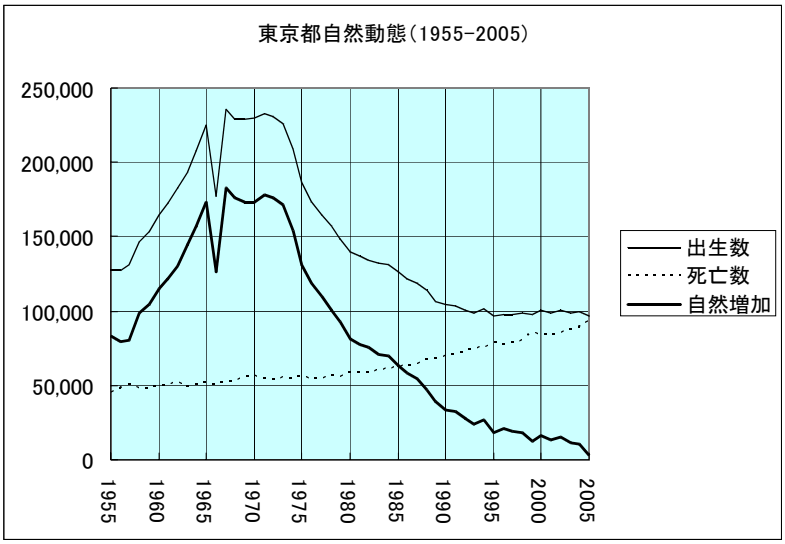
・東京都全体の自然動態の動向は、区部とそれほど大きな違いはない。1965年まで出生数が増加、70年代前半までは、高原状態が続いている。

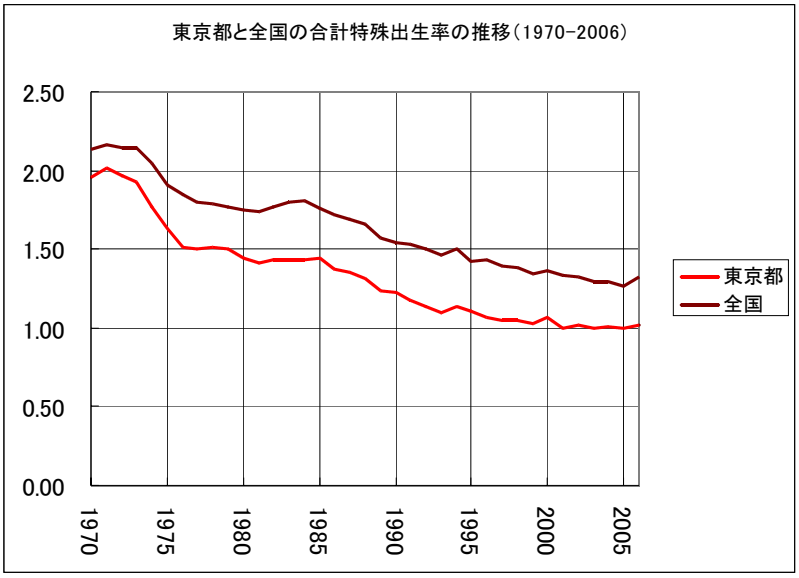
・70 年代前半に、東京都全体で人口が減少しなかったのは、社会減を自然増で埋め合わせていたからである。

・70 年代後半から出生数は急速に低下し、死亡数は徐々に増加してきた。そのため、自然増加数はゼロに近づきつつある。

・2000 年以降の人口増加は、もっぱら転出数の減少によるものである。

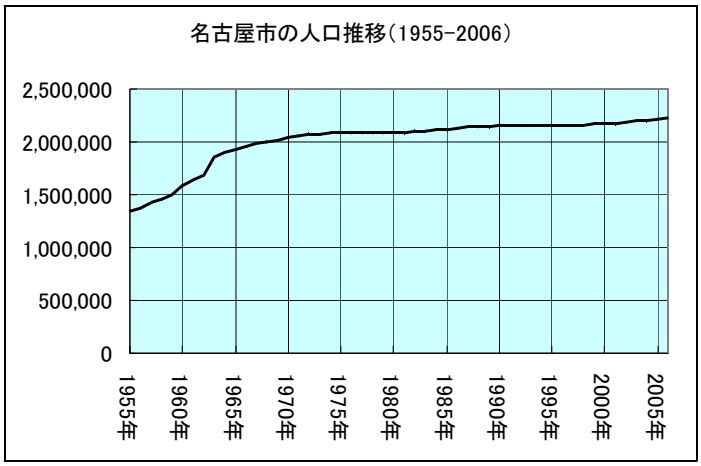
・ちなみに、東京都の合計特殊出生率は、つねに全国を下回っており、現在 1.00 近傍にある。





4. 名古屋市の人口動態

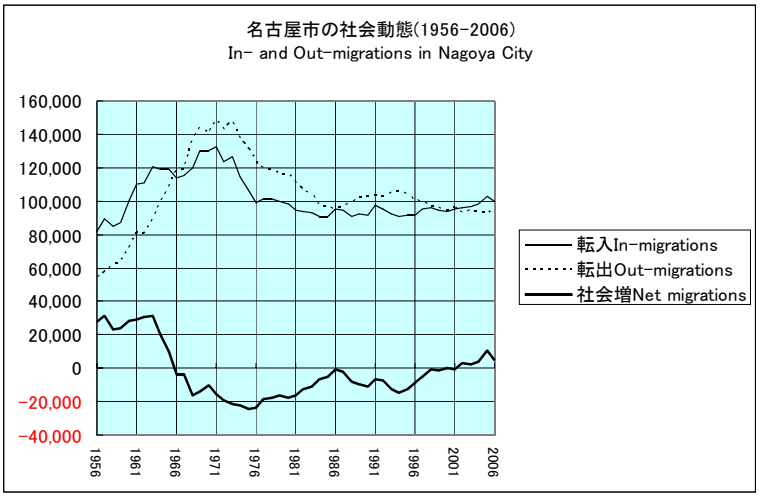
・1955 年～ 2006 年までの名古屋市の人口推移を、名古屋市による人口推計によって見てみると、1960 年代後半から人口の伸びが鈍化し、1990 年代には減少傾向さえ見られたが、1990 年代後半以降、ふたたび増加に転じた。



●社会動態

・名古屋市の社会動態を見ると、1960 年代前半までは、転入が転出を 3 万人前後上回る社会増であった。

・1960 年代後半から、社会減に転じ、1970 年代には年間 2 万人前後の社会減となった（転出先のほとんどは、名古屋市近郊）。



・1980 年代前半には、転出数が低下して、社会減は 0 に近づいたが、1985 年以降、ふたたび転出数が増加し、社会減となった（バブル経済期の第二次郊外化）。

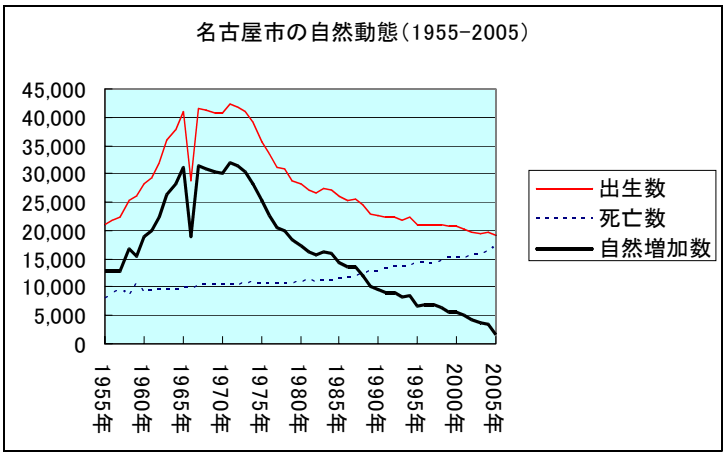
・しかし、1990 年代末には、郊外化は終熄し、ふたたび社会増に転じた（再都市化）。

→このパターンは東京都と類似している。

●自然動態

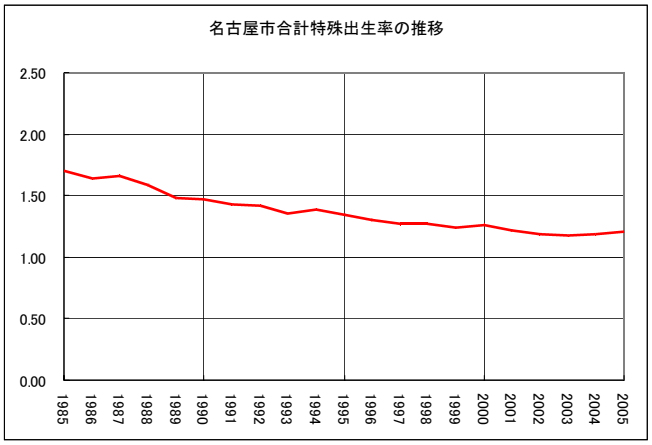
・1960 年代前半までは、出生数の増加にともなって自然増加数が急伸。1966 年の丙午以降も、1970 年代前半は、年間 3 万人以上の自然増加を記録している。

・ここでも、東京都と同様に、高度経済成長前期に転入した若年層が、家族形成期をむか



え、出生数が増加。郊外化による社会減を埋め合わせていた。

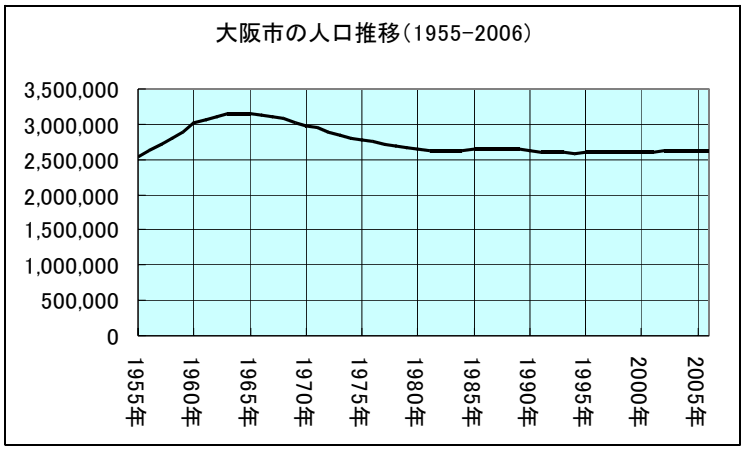
・1970 年代後半から出生数が減少し、高齢化にともなう死亡数の増加とあいまって、自然増加数は減少傾向にある。合計特殊出生率も低下傾向にある。



→名古屋市の人口動態は、規模こそ異なるものの東京都と極めてよく似たパターンを示している。

5. 大阪市の人口動態

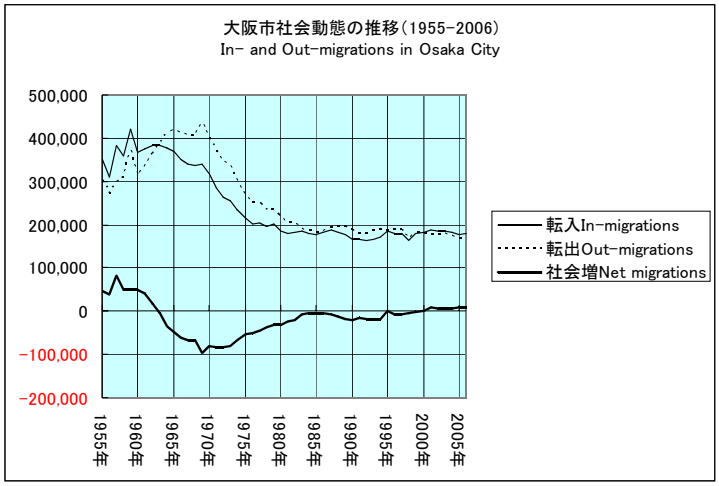
・1955 年以降の大阪市の人口推移を大阪市推計によって見てみると、1965 年をピークに人口が減少。1980 年代中頃に微増に転じたものの、ふたたび 90 年代には減少。2000 年以降、ふたたび微増に転じた。人口のピークは 1940 年の 325 万人であった。



●社会動態

・大阪市は、1960 年代初頭までは、転入超過の社会増であったが、1963 年から転出超過に転じ、1985 年に転出入が均衡に近づいたものの、ふたたび社会減となった。

・2000 年以降は、社会増に転じ、再都市化の兆しが見える。



→大阪市の社会動態は、東京 23 区のそれとよく似ている。しかし、2000 年以降の再都市化の趨勢は、東京に比べて弱い。

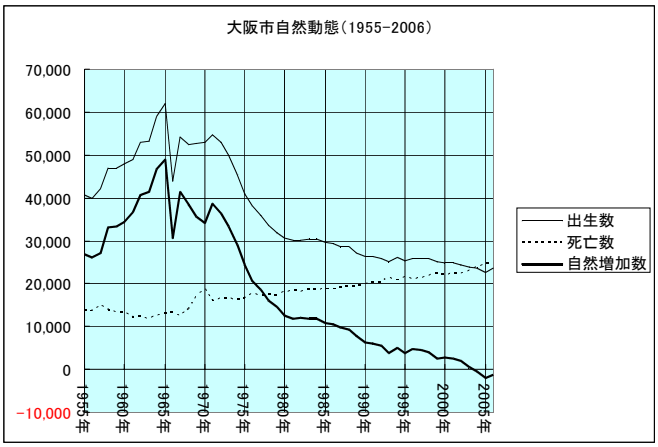
●自然動態

・1960 年代前半は、出生数が急増し、それにともない自然増加数も急増した。

・しかし、1966 年以降、出生数は低下傾向を見せ始める。これは、子育て期をむかえた家族が郊外に転出していったためである。

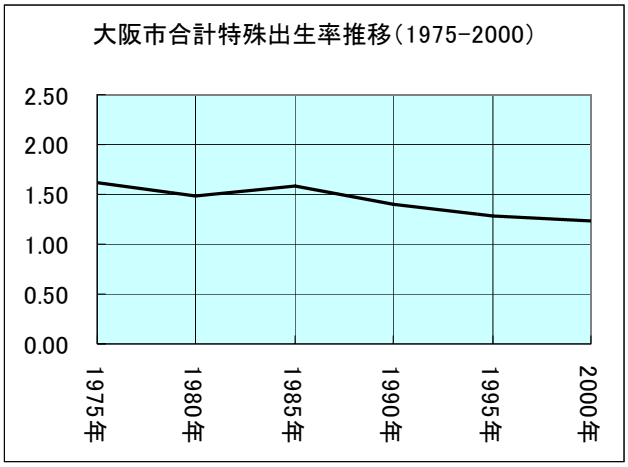
・さらに、1970 年代から少子化による出生数の減少が重なる。

・高齢化にともなう死亡数の増加が次第に顕著になり、2004 年以降、ついに自然動態はマイナスとなった。



→東京 23 区と比べても、大阪の自然動態は、1966 年以降、出生数の少なさが目立っている。

・ちなみに、合計特殊出生率は、名古屋とほぼ同等である。



6. 総括表

		社会動態	自然動態	人口推移	
都市化段階	1955-65	++	+	+++	
第一次郊外化段階	1965-85	−−	++	−/+	東京区部と大阪は減
第二次郊外化段階	1985-96	−−	+	−/+	東京区部と大阪は減
再都市化段階	1997-	+	0	+	